黑木勘藏君の淨瑠璃史に序す

追憶を以て序にかへる。

私は昭和十七年十月中旬に催された、黑木君の十三回忌辰の追悼會に於いて、左の追憶を語つた。

「私は黑木君の本領たる淨瑠璃の研究に對して、批評がましい事をいふ資格のない者であります。それで據ろなく、思出の二三を拾つて、責をふさぎたいと思ふのでありますが、私が始めて黑木君を見たのは、早稻田の教室に於いてでありました。但し私の受持つたのは、作文、英語の二科目だけで、その時は唯だ、これはしつかりした文章を書く生徒だ、英語の輪講もなかなかよく出來ると思つただけでありました。

黑木君の專門は哲學でありました。その爲めでもあつたでせう、私は卒業後の君について、

何事をも知らずに居りましたが、突然君が異風の存在に驚かされたのは、大正の末年頃であつたと思ひます。或る日坪内逍遙先生をお訪ねいたしますと、先生のお話に、「今黑木が來て歸つたところだが、此頃ひどく淨瑠璃の研究に身を入れてゐるやうで、今の文壇はジャーナリスチックな主觀的の氣餘論を悅んでチャホヤするが、眞面目な地味な研究を一向認めてくれない、と云つて不平を言ふから、何、君の淨瑠璃年表が出るといふのは、もう已に社會が君を認めて居る證據ではないか、これからいよ〳〵認められて來るに相違ない、大いにやり給へと云つて、激勵してやつたところだよ。なか〳〵よく調べて居るやうだね」と言はれました。

私は黑木君が卒業以來、哲學研究の道を進んで居られることとのみ思つてゐましたので、近來淨瑠璃の研究に精魂を打ち込んでゐるといふ此の初耳の話に驚かされたのでありましたが、その後更に驚かされたのは、文學部に於ける會議の折でありました。

これもたしか、大正の末年頃であつたと思ひます。金子馬治君が文學部の教務主任（今の學部長）をして居る時でありました。その頃は文學部にまだ國文學、英文學、フランス文學などいふ細かい分かちがなく、唯だ英文學科、哲學科といふ二大別があつた丈でありましたが、その英文學科の一部分を成してゐた國文學の振興を謀らうといふやうなことで、その方面の教師達

が十數名集まつた折のことであります。議題は主として近松の研究で、みんながそれ〴〵の意見を述べる中に、かういふ會議に始めて出席された黑木君の議論が、すつかり質の違つた特色のあるもので、一同が耳を欹てゝ、驚きもし、賴もしくも思つたのでありました。

黑木君はやがて講師として文學部に迎へられることになりました。初めて擔當されたのは淨瑠璃史の一科目でありましたが、大層評判がよいので、二年目頃から、別に近松研究の一科目をも擔當されるやうになりました。かくして江戸文學の中心ともいふべき二つの主要課目を擔當して、次第に研究にも實が入り、學生の仰望をも集めて居られたさ中に、突然四十九歳にして永眠されたのであります。それは我が早稻田大學の國文學科の爲めには勿論、學界全體の爲めに、實に歎惜に堪へない次第でありました。

先きに國文學振興の會議に出られた時、會が果てゝ後に、金子君が、「僕は黑木を他日哲學科に迎へるべき人と思つて豫期してゐたが、それが國文學科の有力者になるとは、世の中は不思議なものだね」と言はれたので、私は「それが謂はゆる楚材晉用だよ」と云つて、心ひそかに國文學科の幸運を悅んだのでありました。また實は、心の中で、遠からず、我が學園の國文學科の專任教授になつて貰ふことを豫期してゐたのでありましたが、人事意の如くならずとは、

此の事でありませう。

また黒木君は元來哲學を修められたので、その方面の頭の優れた人でありました。中途から國文學界に飛入りして、あの立派な業績を殘されたのも、一つは哲學の頭を以て、國文學の舊い資料に新らしき料理を加へられたからでせう。しかしながら私は哲學の研究におのづから二つの途があると思ひます。一つは歸納的ともいふべき綿密な素材整理の方面で、他の一つは演繹的ともいふべき、對象の持つ中心生命を摑んで、生き〳〵と之れを表現し描寫する方面であります。黒木君は無論これらの兩方面に於いて、卓越した手腕を見せられましたが、生前に見せられたのは、主として素材整理の基礎工作でありました。私は君が、その基礎工作の上に立つて、文學の本質の上に立つ光輝ある仕上げの評論を試みられるのを、心窃かに豫期してゐたのでありましたが、其の望みの果たされなかつたのは、實に千秋の遺憾でありました。

けれども玆に一つの悅びは、今度君の遺著の一つとして、『淨瑠璃史』の出版されるといふことで、これは君が講義の手控數種を照らし合はせて出來上がつたものだといふことですが、この著述に於いてこそ、私の遺憾の一部分が充たされることでせう。講壇に立つ學者は、誰れしも經驗のあることでせうが、自ら筆を執つた著述には、用心して容易に公表しない考——し

かも平生重要視してゐて、研究を積めば將來立派な業績となるべき考――を、親しい弟子達には、つい漏らすといふことの、よくあるものであります。黒木君の此の淨瑠璃史にも、恐らくさういふ分子が介在して居ることでせう、また介在してあれかしと、私は切に祈るものであります。」

私はその追悼會で、追憶談に絡んで、こんな事を話したのであつた。私は此の書が、かういふ特殊の經歷を持つ異彩のある學者の著述で、又その成立に特殊の事情を含んで居る次第を述べて、之れを序文にしたいと思ふのである。

昭和十七年十月十八日

友人　五十嵐　力

目次

著者小照（昭和初年）

黑木勘藏君の淨瑠璃史に序す……五十嵐　力

序說

一、淨瑠璃の邦樂史上の位置（邦樂の史的概觀）……一
二、淨瑠璃史の意義並に淨瑠璃史の任務……八

第一篇　古淨瑠璃

第一章　創始時代

第一節　淨瑠璃の起源……一七
一、名稱の起原……一七

二、實質上の起原……三三
第二節　三絃の渡來と流行……二九
第三節　夷舁の由來……三六
第四節　人形劇の成立……四五
第五節　當時の淨瑠璃の內容……五三
第六節　說經淨瑠璃概說……六一
——特にその起原と淨瑠璃との關係——
第二章　古淨瑠璃發展時代（寬永—承應）
第一節　江戶の概況……七三
一、杉山丹後掾……七四
二、薩摩淨雲……七六
第二節　京都の概況……八一
一、左內（若狹守藤原吉次）……八三
二、伊勢島宮內……八四
三、六字南無右衞門……八五

第三節　當時の人形芝居の構造と實演の概況……八八
第四節　當時の淨瑠璃の內容と結構……九三
一、史　劇……九六
二、靈　驗　物……九九
三、お家騷動物……一〇一
四、人　買　物……一〇七
結　語……一一〇

第三章　古淨瑠璃全盛時代（萬治—寛文—天和）

緒　言……一一三
第一節　江戸の盛況……一一五
一、和泉太夫（櫻井丹波少掾）—金平節……一一六
二、二代目薩摩太夫……一一五
三、土佐少掾—土佐節……一一六
附、手品節・式部節
四、薩摩外記—外記節……一一八

五、虎屋永閑—永閑節……一二九
六、肥前掾—肥前節……一三〇
七、近江大掾語齋—語齋節（近江節）……一三一
八、長門掾……一三二
九、その他の諸流……一三三
第二節　上方の概況……一三五
一、虎屋喜太夫……一三五
二、井上播磨掾……一三七
三、山本土佐掾—角太夫節……一四五
四、松本治太夫—治太夫節……一四八
五、都一中—一中節……一四九
六、岡本文彌—文彌節……一五二
第三節　宇治加賀掾—嘉太夫節（加賀節）……一五七
一、略傳……一五七
二、加賀掾の正本……一六〇
三、加賀掾の功績……一六七

第四節　當代淨瑠璃の形式……一七五
第五節　當代淨瑠璃の內容……一八四
一、正本刊行の活況……一八四
二、內容の概觀……一八五
三、內容の各說……一九〇
（イ）武勇物……一九〇
（ロ）叛逆物……一九四
（ハ）敵討物……一九五
（ニ）宗教物……一九七
（ホ）精魂物……二〇二
（ヘ）人情物（戀愛物）……二〇三

第二篇　義太夫劇

第一章　淨瑠璃劇大成時代（元祿時代）

第一節　序說……二〇七

一、緒　言……二〇七
二、當代歌謠の概觀……二〇九
第二節　竹本義太夫……二一
一、小　傳……二一
二、義太夫の史的位置……二一七
第三節　近松門左衞門とその事業……二二
緒　言……二二
一、近松の傳記……二二四
二、作品の年代的概觀……二四
三、作品の題材……二九
(1)場　所……二五九
(2)時　代……二六五
(3)詩　材……二八三
イ、時代物の詩材……二八三
ロ、世話物の詩材……二九六
四、近松戲曲の形式……三〇五

（1）表現様式……三〇六
（2）組織について……三一三
イ、時代物……三一六
ロ、世話物……三三八
五、近松戯曲の内容……三三四
第四節　豊竹越前少掾と豊竹座……三八一
一、豊竹越前少掾の略傳……三八一
二、豊竹座の起源……三八八
第五節　紀海音……三九六
一、海音の略傳と作品の概觀……三九六
二、海音の時代物……四〇五
三、海音の世話物……四一一
（1）椀久末松山……四一三
（2）お染久松袂の白しぼり……四一七
（3）笠屋三勝廿五年忌……四二四
（4）八百屋お七……四二八

四、海音の世話物の特色(近松との比較)……四三三
第六節　近松・海音以外の作者と作品……四四三
(1)　錦　文　流……四四四
(2)　田中千柳と西澤一風……四四九

第二章　義太夫劇の全盛時代(享保—寶暦)

第一節　總　說……四五三
第二節　竹豐兩座の盛況……四五八
竹　本　座……四五九
豐　竹　座……四六〇
兩　座　の　作　品……四六一
兩座の太夫と三味線彈……四六三
人形遣と吉田文三郎……四六四
人形と舞臺裝置の新工夫……四六七
第三節　主要なる作者と作品……四七一
(1)　文耕堂(松田和吉)……四七二

(2) 長谷川千四……四八七
(3) 竹田出雲……四九一
(4) 並木宗輔……五〇三
(5) 爲永太郎兵衛……五一六
第三章　義太夫劇の衰頽不振時代(寶暦—寶暦以後)
第一節　概觀……五一九
第二節　近松半二　附竹本三郎兵衛……五三一
第三節　其他の作者……五四五
結語……五四九
黑木勘藏年譜……五五三
あとがき……五五八
索引……五六一

挿繪圖版

一　傀儡師圖（吉川觀方氏藏・洛中情景六曲屏風部分）
二　人形操古圖（渡邊溫行氏藏・正保頃歌舞伎操屏風部分）
三　內記淨瑠璃圖（堂本印象氏藏・四條河原屏風部分）
四　同　前
五　虎屋喜太夫並に河內掾興行圖（吉田暎二氏藏・歌舞伎淨瑠璃繪卷殘缺）
六　竹本義太夫肖像（大阪木谷正之氏藏）
七　近松門左衞門肖像並に自筆辭世（東京松山米太郎氏藏）
八　近松門左衞門筆・富士畫賛（大阪上神田鶴刀自藏）